主　論　文　要　約

No.1

報告番号	甲　乙　第　　号	氏　名	村　山　　龍

主 論 文 題 名：

〈世界全体〉の再創造

―― 一九三〇年代、宮澤賢治受容とその背景 ――

（内容の要旨）

宮澤賢治のテクストを読むということは、テクストのみならず彼の読んだ先行する文献や思想、さらに彼自身の人生といった〈宮澤賢治〉総体を捉えようとすることに他ならない。他の文学テクストがテクスト論によって作家と切り離されながら読まれようとした八〇年代においても賢治のテクストは作家と常にセットであり続けた。当然、それは賢治のテクストの多くが未定稿であったゆえに、断片的にしか語られない言葉をつなぎ合わせていかねばならない「文学の営み」の結果でもあった。

そうした本文校異の段階から、すでにわれわれが宮澤賢治のテクストを読むときには逃れることのできない、読みのメカニズム（機制）が駆動している。宮澤賢治のテクストには〈宮澤賢治〉がつきまとい、われわれの読みを農業の実践者として苦労した姿と日本にとどまらず世界に通用する理念の提唱者としての姿へとおおまかに集約させていく。この読みの通路を理解するためには、そうした〈宮澤賢治〉のメカニズムがすでに完成していた一九四五年以前、すなわち没した一九三三年から一九四五年までに〈宮澤賢治〉が成立した過程と背景を考えなくてはならない。

一九三三年九月二一日に没してからわずか一二年の間に戦後七〇年にわたって流通することになる代表的な〈宮澤賢治〉は彫像された。米村みゆき『宮沢賢治を創った男たち』（青弓社、二〇〇三）は森荘已池や草野心平の働きかけに注目し、〈宮澤賢治〉が〈中央〉ルートで普及したと説明する。しかし、そこには同時に、賢治の生前のことなどを報告するように〈中央〉の側が呼びかけたのに対して答えた〈地方〉である岩手の人びとの文学的欲望もあったはずである。さらには、そもそもなぜ〈宮澤賢治〉がそれほどまでに重要な存在として流通することができたのかという場の問題もある。賢治の初期受容が成された一九三〇年代の文学的空間の内実や、それを支えた社会的状況などもあわせて検討される必要があるのである。

まずは〈宮澤賢治〉が召喚されたトポスとしての文学が一九三〇年代にどのような状況であったかを第一部で考察し、一九三〇年代に人びとが個人と〈世界全体〉をつなぐ意識を生じさせていたことを論証した。具体的には、賢治のテクストにも大きく関わることになるエスペラント、プロレタリア文学運動、モダニズム文学、〈日本的なもの〉といった概念が文学の場において語られた意味をそれぞれ考えた。

これらの概念はすべて、近代において生成された個人を基盤にして思量された文学的テーマであった。エスペラントは言葉を奪われることによって文化的根源を失うことから人びとを守るためのものとして機能し、プロレタリア文学運動は国際的分業化のなかで虐げられた労働者たちが自らの尊厳と自由を取り戻すためのものであった。両者が結

びついたプロレタリア・エスペラント運動が日本でも展開されたように、個人の尊厳と自由を謳った近代社会が、同時にそれを踏みにじるような二律背反をかかえ込んでいたために噴出した不満に応じたものがエスペラントとプロレタリア文学運動であったのだ。

またモダニズムはいわゆる〈伝統〉と対峙しつつも利用することによって現状を革新する方法を求めた。第一次世界大戦によってヨーロッパが紡ぎ上げてきた近代社会の論理や価値観は崩壊しつつあった。シュペングラーが『西洋の没落』（*Der Untergang des Abendlands* 1918,1922）を発表し、ヨーロッパ文明の危機を唱えたとき、ヨーロッパの理念を移入した近代的国家となっていた日本もまた危機感を募らせていた。文学においてはそうした危機意識と価値観の刷新を求める意識がアヴァンギャルドからモダニズム文学へと進展し、新たな時代と関係を保とうとしていたのである。

このように、同時代の文学者らは新たな概念を文学の場に持ち込むことによって〈世界全体〉への認識を更新することを試みていたのである。

第一部の各章の内容は次の通りである。

第一章では一九三〇年代に噴出するさまざまな問題の起源としての二〇世紀初頭を主にエスペラントの誕生と受容を見ることによって考察する。ザメンホフがつくり出したエスペラントというシステムは、「ことば喰い」（ルイ＝ジャン・カルヴェ『言語学と植民地主義』、砂野幸稔訳、三元社、二〇〇六、*Linguistique et colonialisme* 1998.）によって文化的な根源を失ったデラシネたちを救い、〈帝国〉に対抗するためのものであった。こうしたエスペラントによる新しい社会運動が日本に受容された際に、興味深いのは秋田雨雀の活動である。秋田雨雀は宮澤賢治と同様に東北出身で文学的には詩と童話、戯曲に身を捧げ、イデオロギー的には社会全体の改良を望んだ。そして雨雀は一九二八年に佐々木孝丸、伊東三郎らとともに国際文化研究所（翌年、プロレタリア科学研究所と改称）を設立し、機関誌『プロレタリア科学』を毎月発行した。そして『若草』一九三一年四月号から一二月号まで（八月号除く）「エスペラント新講座」と題して連載をもち、プロレタリア・エスペラント運動の旗手として活躍したのであった。

その雨雀がエスペランティストとしての活動を始めた初期に発表した「緑の野」（『中央公論』、一九一五・七）に言及する。「緑の野」はエスペラントを用いた戯曲であり、テクストの内容と表記を通じて同時代的な問題に接続することが可能なものとして解釈できる。そこでは、日本語という〈帝国〉の言語では明らかにすることができない反戦の考えを発言することができるものとしてエスペラントが用いられていた。このエスペ

ラントの使用は、エスペラントによるコスモポリタン意識の生成と平和運動を求める「ブーローニュ宣言」（La Deklaracio pri Esperanto 1905）の理念にかなったものであると同時に、エスペラント話者だけにしか通じないことから秘密をつくるための会話としても機能していた。心中の解放と他者を排除する統制された状況の相反する二つの傾向がエスペラントによって生み出されていることが「緑の野」には示されていたのである。ここに示された解放と統制といった両義性が、その後の一九三〇年代における〈世界全体〉と個人の関係が解放と統制の両義性にまで継続していったと考えられる。これらの分析を通して、雨雀が一九一五年という第一次世界大戦が始まって一年経った時期に目指した「未来の緑の野」は一九三〇年代の問題系の始点として意味づけることができると指摘した。

第二章では賢治の没した一九三三年前後に最大のピークを迎え、小林多喜二の虐殺や佐野学・鍋山貞親のいわゆる「転向声明」（『改造』、一九三三・七）によって一気に退潮していったプロレタリア文学運動の理念と限界について考察する。一九二〇年代から三〇年代にかけて社会主義的イデオロギーによって〈世界全体〉を新たにつくり直そうとしたプロレタリア文学運動は、当時もっとも精力的な〈世界全体〉を更新するための運動であった。これを論じる際に、中心的に取りあげるのは前田河廣一郎「川」（『改造』、一九三二・七）である。主人公の田無三五郎が磧での労働の最中に大けがをして働けなくなり、それがきっかけになって三五郎同様にひどい労働環境に追いやられていた仲間たちがストライキを起こすといった内容は、同時代において既に「プロレタリア小説らしい小説にするために、現実がこんなに歪められ」た（阪本越郎「文芸時評」、『新文芸時代』、一九三四・八）と言われるほどに「プロレタリア小説らしい小説」として理解されていた。

確かにこのテクストを分析していくと、自然生長した〈運動〉と資本主義経済の対立や労働者を取り巻く状況の機械性、そしてテクスト外部で〈運動〉を称揚するための目的意識を十分に内包したテクストとして「川」は読むことができる。しかし、その「プロレタリア小説らしい小説」のなかに盛り込まれた実験心理学的な記述と、働けなくなった三五郎が動けないゆえにひとり脳裏で磧の状況を再構築していく様子が描かれたことによって、「川」はテクストの〈運動〉が抱え込んでいた問題をあぶり出すこともしている。それは個人の尊厳と自由を回復するための手段であった〈運動〉が、個人の尊厳と自由を束縛し〈運動〉を遂行するための「機械」のパーツとして見なしていく様相である。この問題を通して、プロレタリア文学運動の理念の射程と限界を考察した。

第三章ではプロレタリア文学運動と同時期に文学の場において対立軸としてあったモダニズムの進展を考察する。そのなかでも中心的に取りあげて論じたのはモダニズム詩の中心的イデオローグであった春山行夫である。

春山は当時、『詩と詩論』（全一四冊、厚生閣書店、一九二八・九～一九三一・一二）と『新領土』（全四八冊、アオイ書房、一九三七・五～一九四一・五）を中心に自らの「詩論」を展開し、そこで〈伝統〉を再解釈することによって文学の革新を求めていた。ジャンルと作品の関係を「分解」し、その後の新しい文学の創造を志すということが、春山にとってきわめて歴史性を帯びた問題として意識されていたのである。それゆえ文学史上の「最も重要な革命」として自らの主張を位置づけていた。春山にとっての文学における「〈考へる〉といふ精神の活動」、すなわち主知主義とはまさにジャンル編成と関わる文学的営為の積み重ねを知性によって精査し、検証することを指し示すのである。新しい詩は自らの言葉と表現の歴史性を解体した後に組み替えられる言葉の芸術として成立することになると春山は主張していた。この春山の主張と軌を一にするものとしてたびたび紹介され、春山自身もそこから影響を受けていたのが T・S・エリオットであった。『詩と詩論』から『新領土』にいたるまで、春山は自らの詩論を語ると同時にエリオットを紹介し、彼の〈伝統〉という概念を積極的に受容していた。同時代の詩人たちの中心的イデオローグとして機能し、大きな影響力を誇っていたと考えられる春山がエリオットを受容して示したモダニズムと〈伝統〉の接続は、彼らが〈日本的なもの〉という〈伝統〉を重視した戦時下の文学活動を可能にした理路として機能したと考えられる。

また同じくエリオットを受容して〈世界全体〉の論理的な転回を行おうとした西田幾多郎は「私と汝」（『岩波講座哲学』第八巻、一九三八）や「伝統主義に就て」（『英文学研究』、一九三五・五）を中心に超越的な〈伝統〉を志向し、それを「超越的な」「catalyst」として「世界新秩序」を再構築することを目指した。西田の示した「世界新秩序」への通路は三木清や鈴木成高らに継承され、東亜協同体論や近代の超克へと展開していった。すなわち一九四〇年代の大東亜共栄圏の理論的な核はエリオットの〈伝統〉論を触媒にして生成されたと考えられるのである。

このように、春山行夫がモダニズム詩人たちに〈伝統〉の再解釈と利用を呼びかけ、それと時を同じくして西田幾多郎が〈伝統〉を紐帯とした「世界新秩序」の構築を呼びかけたとき、T・S・エリオットの受容とそれによる〈伝統〉の再帰的な発見によってモダニズムを経験した人びとが、両者の論理の一致によって、一九四〇年代の大東亜共栄圏という戦時体制に容易に糾合されていくことになる。〈伝統〉と個人の接続の結果としての〈世界全体〉が確立されたのである。

第四章は戦時体制に糾合されることになる前夜、松本学に主宰された文藝懇話会という組織について検討する。文藝懇話会は「「非常時」の声に押されて文芸家仲間と思想取締当局との間に

「文筆報国」とでもいふべき一団が」「日本精神」を作品に反映させている直木三十五と内務省警保局長の松本学を中心に集められたという（「警保局の後押しで帝国文芸院の計画」、『東京朝日新聞』、一九三四・一・二五）。直木は「政府が思想善導だ、なんのかんのといつてみたところで、文学によつて広くインテリ層にまみえてゐる作家群を見のがしてゐてはまるで意味をなさない」と言い、松本は「皇道精神の発揚と日本文化のは握を目指すもので」「行く／＼は『文芸院』といつたやうなものにまで育てたい希望」があると語っており、これらのコメントからは「非常時」とされる時局の中で文芸家を糾合していこうとする様が看取できる。

このような経緯から開かれることが決まった文藝懇話会を分析するにあたって、人首文庫所蔵「文藝懇話会参考資料」・「文藝懇話会記録」を用いる。当時、内務省警保局図書課の属官であった佐伯郁郎（本名・慎一）によって残されたこの資料をみることによって、雑誌や新聞に寄せられた文芸家たちの文藝懇話会が統制に向かうのではないかという批判が内務省内部に浸透していたことがわかった。この批判を参考資料として内務省内部に持ち込んだ佐伯もまた詩人であり、宮澤賢治の初期受容にも大きな役割を果たした文芸家の一人であったことから、こうした批判の声に敏感であったと考えられる。その結果、文藝懇話会は当初の目的であった「思想善導」のための、内務省によるものにせよ自発的なものにせよ、検閲による〈禁止〉的措置の不可能を悟らざるを得なくなった。それゆえに、刊行された『文藝懇話会』（全一八冊、一九三六・一～一九三七・六）という機関誌は統制自体への批判をする言説をも含み込んだリベラルな雑誌になったと考えられる。

ただし、文藝懇話会という失敗は当局の側に〈禁止〉への反発を悟らせたがゆえに、新たな統制を創出させることにもつながった。松本が次に開いた新日本文化の会は、佐藤春夫や中河與一の協力を取り付け、日本主義という誰もが反論しにくい議論によって、当局の側からの反論すら押さえ込み、行き詰まった文化的状況を打開したいという文芸家たちの欲求をうまく取り込んでいった。書かせないのではなく書いて欲しいことを要求する、〈禁止〉から〈改善〉へと統制のあり方が変化していったのである。佐伯郁郎も関わった、内務省と児童文学者らによる「児童読物改善問題」（一九三八）はその変化を表わす最たる例としてあげることができる。

内務省は文藝懇話会という失敗すらも経験に変え、新たな方策で文化人全体を統制していった。結果として、文芸家たちはそれぞれが〈日本的なもの〉や健全なものへと〈改善〉していくことで新たな統制に組み込まれていったのである。モダニズムやプロレタリア文学運動といった一九三〇年代に最大限の輝きを放った文学運動は〈世界全体〉の

再創造という目的はそのままに、しかし方法を国家的かつ国民的要請の枠組みのなかへと〈改善〉されていったと考えられるのだ。これによって多種多様であった〈世界全体〉への試みが〈日本的なもの〉へと収斂される姿を示した。

第二部では、第一部で検討した文学というトポスに、〈宮澤賢治〉がどのように現れ、機能したかを考察する。宮澤賢治は「世界全体が幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」と述べ、常に個人と世界との関係を考え続けた作家であった。一九三三年九月二一日に没した後に、彼のテクストは原稿から書き起こされ、書物のかたちをとりながら人びとのなかに受容され、受容した人びとの言葉が〈宮澤賢治〉を改めてつくりだしていくという相関関係を結んでいた。この相関関係を軸にして成立していった初期受容の様相を分析することによって、宮澤賢治のテクストに残された〈世界全体〉への志向が同時代の志向と連関していた姿を明らかにすることが目的となる。

第二部の各章の内容は次の通りである。

第五章では、そのために必要な前提として賢治のテクストが没後にどのように発表されていったかを文学史的に概観する。没してすぐに草野心平を中心に全集刊行が企画されたが、当初は横光利一の薦めによって文体社から刊行される予定であった。しかしこの企画は賢治が無名の作家であったことを理由に頓挫してしまい、結果的に最初の全集を出したのは当時『文学界』を刊行していた文圃堂であった。しかし文圃堂もすべての賢治テクストを刊行することはできず、選集的にやることが決まり、文圃堂版全集はわずかに全三巻のものになって一九三四年九月から一九三五年九月にかけて刊行された。その後、文圃堂版全集がわずか一年余りで出版社の倒産によって入手できなくなってしまい、賢治のテクストは再び読むことが難しいものになっていた。

その際に登場したのが、松田甚次郎編『宮澤賢治名作選』（羽田書店、一九三九）と十字屋書店版全集（全七巻、一九三九〜一九四四）である。両者は初期受容において基盤となる賢治テクストとして重要なものとなったが、特に『宮澤賢治名作選』はテクストの提供のみならず、編者である松田甚次郎の名前とともに〈宮澤賢治〉形成に多大な影響力を誇ったと考えられる。松田はベストセラーになった『土に叫ぶ』（羽田書店、一九三八）の筆者であり、賢治に教えを受けて山形で農村運動を拡げようとしていた人物である。松田の言動は当時の農本主義の広まりの影響もあって、広く全国に受容され、その流れにのるかたちで宮澤賢治の名前も流布していった。その結果、〈宮澤賢治〉には農村改良に力を入れた「聖農」としてのイメージが強固に結びつけられることになっ

たのである。

第六章では全集公刊に大きな役割を果たした横光利一が初期受容に影響を与えたことを論証した。特に注目するのは文藝春秋講演会（於・盛岡公会堂、一九三四・九・二一）での講演内容である。横光は、この講演会で「中央と地方　宮澤賢治氏について」と題した講演を行っている。このなかで横光が主張するのは、〈地方〉に住む人が〈中央〉の文壇で活躍する第一線の文学者に比べれば劣るという通説に対する批判である。〈地方〉に住んでいたとしても、「精神生活」を手にすれば〈地方〉的な存在から抜け出すことができるというのが横光の批判の主旨であった。そしてその「精神生活」を手にし、一〈地方〉的存在から脱した好例として宮澤賢治を取りあげるのである。賢治は横光によって〈中央〉／〈地方〉という概念を脱する存在として語られ、それは講演会場に集まった「町のインテリ階級諸氏」の前に提示されたのである。

この横光の提言は、当時横光自身が新しい「純粋小説」に向かって思索を深めていたことと不可分ではない。横光の〈宮澤賢治〉はそうした新しさを持ったものとして提示されたのであった。そしてこの「精神生活」という言葉は賢治を語る際のひとつのパターンになっていく。講演会が行われた岩手においては母木光や森荘已池が『岩手日報』紙上で賢治を称揚する際に繰り返し用いたし、東京でも草野心平や田中令三、笹沢美明らが使用した。しかも草野は自ら編集にあたった『宮澤賢治研究』（全五冊、宮澤賢治友の会、一九三五・四～一九三六・一二、以後友の会『研究』と記す）において、そのような賢治の実生活がどのようなものであったか提出して欲しいと岩手の人びとに呼びかけ、「生活記録」や「伝記的素材」を蒐集していった。この過程で〈中央〉の賢治受容者たちは〈生活者としての宮澤賢治〉という新しい宮澤賢治像を見出していったのであるが、これは〈地方〉から送られる賢治の「記録」という素材が機能した結果であり、友の会『研究』という表象の場において〈中央〉と〈地方〉は連動していたといえるのである。そして〈中央〉の生活への注目と時を同じくして、岩手という〈地方〉でも賢治の生活への注目は高まり、賢治の生活を賢治受容の一ジャンルとして確立しようとしていた。つまり同じ素材を手にした〈中央〉と〈地方〉の双方からよく似た形の賢治像が提出されているのである。横光の発言が同時代の〈中央〉・〈地方〉において〈宮澤賢治〉を受容していくときの尺度のひとつとして強固に浸透し、一九三四年以後のメルクマールとなっていったのである。

第七章では、初期受容における評価の変遷を辿る。『春と修羅』（関根書店、一九二

四）の同時代評では辻潤によってダダイズムやプリミティヴィズムとの関わりのなかで評価されていた〈宮澤賢治〉であったが、没後すぐの『宮澤賢治追悼』（次郎社、一九三四・一）と友の会『研究』（前掲）、『宮澤賢治研究』（草野心平編、十字屋書店、一九三九・九、以後十字屋『研究』と記す）を概観することで、多種多様な〈宮澤賢治〉が生成されていたことが確認できる。

まず『宮澤賢治追悼』の内容から確認できたことを挙げる。高村光太郎「コスモスの所持者宮澤賢治」と小野十三郎「田園交響楽」はどちらも賢治が地方在住の詩人であったということに着目し、その結果獲得されたテクストの特異性とそうしたテクストが持ちうる一般性を接続させようとしたものである。「コスモス」をもち、「詩人としての優れた手腕」を以て「現実（レアリテ）」を映し出そうとした〈宮澤賢治〉は、彼らにとって近代という枠組みを問い直す存在としても認識されていくのである。近代という時代との関わりについては佐藤惣之助「心外だ！」や吉田一穂「虫韻草譜」、永瀬清子「宮澤賢治さんの空気」などにおいて当時、既に現代に至るまで賢治像の中核を占めていくことになる〝近代を超克したものとしての〈宮澤賢治〉〟が登場してきているのがわかる。そしてそれは黄瀛「南京より」や岡本彌太「「宮澤賢治」へのノート」に見られるような宗教的概念との接続を見る理解とも接続するものであった。

以上のように『宮澤賢治追悼』には、初めての賢治論集であるにもかかわらず、コスモポリタン的な芸術家としての姿や近代への対抗概念としての姿というような現在にも通ずる〈宮澤賢治〉の原型となるものが提示されていることがわかる。しかしここで評価されることになったのは賢治の作品とそこから得られる印象についてであって、賢治の生活に視点を当てた考察はなされていない。すなわちテクスト論的な考察がこの段階ではなされていたのである。当時においては珍しいこのテクスト論的考察がなされた背景には『宮澤賢治追悼』に寄稿した論者たちが賢治の生活実態を知らなかったという事実がある。米村が「賢治不知言説」という指摘をする要因にもなったこの賢治の生活実態を知らないという状況は、作者である宮澤賢治への興味を〈中央〉の人びとに喚起することになるのである。そしてその興味は第六章でも触れた友の会『研究』において中心的なテーマとなっていくのである。

長谷川渉「賢治・心平交渉年譜」（『わが賢治』、二玄社、一九七〇）によると、友の会『研究』を出版した宮澤賢治友の会では「岩手県在住の、例えば、村井久太郎、岩田徳弥、木口二郎、森惣一、藤原嘉藤治、小泉一郎、小田中光三、小原忠、簡悟などと、東京在住の八重樫祈美子、菊池武雄、照井栄三らと呼応して、文圃堂の好意的出版に酬いる為にも、全集の宣伝方法や頒布方法などを相談」していたようである。その「全集

の宣伝方法や頒布方法」の一環として、友の会『研究』を出版することになった。この友の会『研究』では先述したように岩手の人びとから賢治の「生活記録」や「伝記的素材」が集められると同時に、『宮澤賢治追悼』から引き継いで芸術家としての〈宮澤賢治〉の姿にディテールアップをはかっていきつつ、生活者としての〈宮澤賢治〉や地方人としての〈宮澤賢治〉というものを新たに発見していったと考えられるのである。たとえば、谷川徹三から文圃堂版全集を薦められたという古谷綱武は「殆ど奇跡的といってもよい清澄高潔な人格の美しさに魅かれてゐる。もはやこのひとが文学者であることだけが私の敬愛の唯一の根拠とはなつてゐないのである。」（「全人宮澤賢治」、友の会『研究』、一九三五・一一）と述べ、宮澤賢治の芸術の源泉にはその生活が深く関わっていて、見るべきはそうした芸術を生んだ土壌としての生活の場だと考えていた。『宮澤賢治追悼』にはほとんど見られなかった、生前の生活を基盤とした〈宮澤賢治〉が新たに立ち上げられていたのである。この傾向は十字屋『研究』においても顕著である。十字屋『研究』は松田甚次郎編『宮澤賢治名作選』が刊行された後のものであることと関わって、賢治を農村運動と接続させて論じる傾向が強い。これは水野葉舟「宮澤賢治氏の童話について」や石塚友二「「土に叫ぶ」その母胎」において〈宮澤賢治〉を語る際に松田を引き合いに出していることからも明らかである。そのため、既に土の生活者としての〈宮澤賢治〉という「デクノボー」＝〈宮澤賢治〉化が進んでいて、個々の論の中から見いだせる〈宮澤賢治〉に『宮澤賢治追悼』にあったような多様性がなくなってきていた。「芸術家としての」〈宮澤賢治〉という見方は一歩後退することを余儀なくされていく。さらに「土」や「農民」といった表象と連結する形で地方的色彩を帯びた作品であるという評価もまた繰り返し反復されるようになっている。このような〈宮澤賢治〉の姿を「生活」という一語を以て映し出そうとするステレオタイプの形式が出来上がっていく様子がこの十字屋『研究』のために「書卸されたもの」からは見て取れるのである。

この時期の賢治受容の特徴として、賢治テクストを評価することでその論者自身の芸術観が問い直されるという鏡としての役割を担った点が挙げられる。このため『宮澤賢治追悼』をはじめとする〈中央〉からの賢治受容の最初期段階は、いわばそれぞれの受容者の〈自画像〉ともいうべき、文学という場における自己の立脚点の問い直しになったのである。

第八章では第六・七章で見てきたさまざまな〈宮澤賢治〉が〈日本的なもの〉と接続し、戦時体制下での受容形態へと変貌した理由を探る。そのために横光利一と保田與重郎の二人の言説に注目をする。両者の〈日本的なもの〉の認識については河田和子『戦時下の文学と〈日本的なもの〉―横光利一と保田與重郎―』（花書院、二〇〇九）において詳細な検討がなされていて、河田は横光と保田の主張がそれぞれ「西洋的近代の危機を〈日本的なもの〉によって超克しようとする〈超近代〉＝〈近代の超克〉の志向と、西洋由来の近代的思考そのものを否定する〈脱近代〉

＝〈近代の終焉〉の志向」であったと指摘している。しかし彼らは同じ〈日本的なもの〉という媒介項を手にして日本の近代化の決算をしようとしたという目的意識と方法が共有されていることを考慮すれば、それらは大きな違いとなり得るものではないと考えられる。横光と保田の求めた〈日本的なもの〉への志向を考察することと合わせつつ、〈宮澤賢治〉とこの〈日本的なもの〉をめぐる認識がそれぞれ如何にして連関しているのかを本章では論じた。

まず一九三六年の欧州旅行以後の横光利一が古神道に傾倒していたことと『旅愁』第一・二・三篇（戦前版、改造社、一九四〇～一九四三）をあわせて考察した。横光の求めた〈日本的なもの〉とは、現在の諸矛盾を前にしてその混乱を根本から解きほぐす「原理」であった。主人公の矢代は過去・現在・未来の時間を超越した「六次元の世界」と通ずる「原理」を求めた。それは徹底的に人間の心性の根源へと遡ったものであり、それを知るものは〈世界全体〉の認識を更新していけるものとして設定されている。この時空間を越えた超越的な認識への希求は、第六章で述べた「精神生活」によって一〈地方〉的存在から抜け出すといった〈宮澤賢治〉に託された論理と連関するものである。横光がこうした『旅愁』以後の認識を構築する上で〈宮澤賢治〉の存在はきわめて重要な位置を占めていたものだったのである。

つづく保田與重郎は日本浪曼派のイデオローグとして〈日本的なもの〉を「世界規模」に広めようと企図していた。保田もまた西洋近代から反措定するかたちで〈日本的なもの〉を導き出している。それは第一次世界大戦後の〈ヨーロッパの没落〉による価値観の転換に際して、「ひ弱く浅はかなもの」（「開化の思想」、『帝国大学新聞』六四〇号、一九三六・九・二八）から「戦後の頽廃に耐えるための意志、日本の反省へゆくやうなもの」（『日本浪曼派の時代』、至文堂、一九六九）へと〈日本的なもの〉を再解釈していったということである。保田にとっての〈日本的なもの〉は「ルネツサンス」であり、それによって再生されるのは「万葉精神」であった。これによって西洋近代に由来する世界観からの脱却を保田は求めたのである。その保田にとっての賢治は「変革の歌」を詠う詩人として認識されている（「雑記帖（一）」、『コギト』、一九三七・四）。保田のいう「変革の歌」は、「社会学のことばのあるなしで文芸の社会性を語」るような近代的な知の枠組みのなかに終始する明治以後に接ぎ木された日本近代文学ではない。「リズム」という根源的な好悪の感触に委ねられた、知を解体するような非知の領域からやってくる文芸の心髄である。そしてそうした文芸は「歴史的時期に於て」「変革」をもたらす「世の中の声」であるのだ。すなわち、保田は彼の意識する〈日本的なもの〉の中枢に位置する概念と連関する〈宮澤賢治〉を創造したのである。

このように〈宮澤賢治〉は横光利一と保田與重郎にとって〈世界全体〉と〈日本的なもの〉とをつなぐ〈根〉として機能していた。賢治受容のひとつの達成であるコスモポリタンとしての姿と日本の一地方である岩手で農村運動と創作にいそしんだローカルな存在としての姿の両者を接続する認識が、一九三〇年代には〈日本的なもの〉と連動するかたちで登場していたのである。

〈地方〉的な農村問題に端を発し、〈世界全体〉という拡張された「レアリテ」をもたらす〈宮澤賢治〉は、未定稿であったテクストが編纂されるのと同時に文学の場において召喚され、さらには大東亜共栄圏へと到る社会性を獲得していった。未定稿という可能態としてのテクストを読むと同時に全集に収録される定稿へと書き直していく作業を通して、〈宮澤賢治〉に託されるそれぞれの文学観と同時代に流通した賢治テクストは共犯関係を結んでいくのである。日本が〈世界全体〉との関係を再構築することを求めた一九三〇年代にあって、〈宮澤賢治〉は同時代のアポリアと同期するかたちで文学的な問いの構造へと再創造されていったのである。

第九章は賢治受容のもうひとつの達成である農民としての姿ができあがった背景に焦点を合わせる。花巻で農作業や肥料設計にいそしんだ賢治であったが、その賢治の認識の底にアナキズムへの共感があったことを媒介にして、昭和期農民文学運動との連続性を検討した。

昭和期農民文学運動を中心的に支えることになった第一次～第五次『農民』は相次ぐ奪回や分裂によって再編され続けた雑誌であるが、第一次創刊号（一九二七・一〇）の「創刊の辞」に「「農民」は私達同志の機関ではあるが、厳密の意味の同志でない人々でも、私達と同じ傾向にあつて、私達の志を諒とする人々ならば、その人々の為めに、喜んで門戸を開放」すること、「私達の集りが、そも／＼大同団結であつて、各自の個性や思想やに存する小異を問はない一種の自由聯合」であることが表明されている。この昭和期農民文学運動には先行研究が指摘するようにアナキズムの影響がみられる。犬田卯が農民自治文化聯盟の一九三一年一二月の研究会の席上に提出したという「農民イデオロギー覚え書」（犬田卯『日本農民文学史』所収、農村漁村文化協会、一九五八）をみると、「アナキズムからは農民文学を特に主張する根拠がない」と述べ「農民イデオロギー」の独自性を唱えてはいるが、返す刀で「アナルシーを結果する組織を根本としなければならない」と言い、さらに「自ら別名を要求してもいゝ」といってしまっている点から、自分の主張する「農民イデオロギー」とそれに基づく社会運動がアナキズムの主張とほとんど変わらないと認識していることは明らかである。マルキシズムと相容れず、徹底的に集団の権力を忌避してあくまでも独立した個人の自由を求め、その結果としての緩やかな連合を求めたのが昭和期農民文学運動のめざしたものだったのである。

こうしたアナキズムと昭和期農民文学運動の連関を踏まえて宮澤賢治へとまなざしをむける。具体的には「農民芸術概論綱要」を中心に論じた。「農民芸術概論綱要」は室伏高信の影響があることが既に先行研究によって指摘されている。しかし賢治は室伏の主張を入り口にはしたものの、最終的には室伏が農本主義的に読み替えた農工業の「合成」をクロポトキンが提示したものに近い、より原的なかたちで認識し、提示しようとしていたと考えられる。科学はアナキズム的な社会改良論において重要なファクターのひとつとして機能し、賢治もまた同様の認識をかちえていたのである。

より良い〈世界全体〉として相対的ユートピアを目指したアナキズムと宮澤賢治がたどった道行きは連関するものであった。そして「永久の未完成これ完成である」と叫び、「新興文化の基礎」となるべき「四次芸術」の構築を目指して数多くの未定稿を残した賢治のユートピアが「農民芸術概論綱要」に示されていると考えられるのである。そしてそのユートピアは、原型として受容者のなかでさまざまな形に変容しながら受け入れられていった。その過程で一九三〇年代の問題機制と通路が結ばれ、第八章で見たような戦時下の賢治受容を生むことになったのである。

最終章では賢治テクストが目指した「第四次元の芸術」とはなんであったかを論じた。賢治は自らのテクストを「論料」（データ）と呼んでいた。「論料」が意味を持つためには、それをまとめ上げることの出来る主体によって〈物語〉として紡がれなくてはならない。すなわち、人間が〈世界全体〉に主体的に関わるときの方法として、客観かつ合理的な科学的思考によるデータの記録とそれを意味づける価値創造としての〈物語〉の創作という世界制作の方法を賢治は発見していたのだと考えられる。こうした現象学的な認識は『春と修羅』や「銀河鉄道の夜」（初期形第三次稿）や「グスコーブドリの伝記」に「げんしやう」としての「世界」や「たゞさう感じている」だけの世界、「歴史の歴史」のような相対的な世界というかたちで表現されている。賢治にとって重要なのはそうした変化する「歴史」や〈世界全体〉を前にして、瞬間瞬間に自分の心のなかでで生起していることを記述するということであった。「歴史の歴史」はその「論料」を用いて構築された相対的な〈物語〉なのである。これこそがわれわれにできる唯一の〈世界全体〉との関わりを持つ方法なのである。

賢治の求めた「第四次元の芸術」とは〈世界全体〉の脱創造と再創造の往還によって達成される運動を示すものであった。賢治テクストを読むということは、「近代科学」のもとで科学的・客観的に認識されることによって主体的に振る舞うことのできない「灰色の労働」をするだけの〈本質〉を与えられた人びとに「不断の潔く楽しい創造」、すなわち〈世界全体〉の再創造による自らの存在の意味を取り戻させることであったのだ。これこそが賢治のテクストの導く文学的営為であったと考えられるのである。

宮澤賢治の人物像とテクストは没後、さまざまな人びとによってそれぞれの文学観に適合するかたちで読み取られ、評価に値する〈宮澤賢治〉がつくり出されてきた。ある物ごとの価値とは、提示された状況の中でその物ごとの持つ意味を再解釈し、他の物ごととは異なるのだという位置取りをした結果である。すなわち価値創造とは、評価される物ごとと評価する〈私〉を掛け合わせていくことによって新たな意味をつくり出す行為にほかならないのである。

そうしてつくり出された〈宮澤賢治〉たちはそれぞれが独立ないしは連繋しながら、また新たな〈宮澤賢治〉を生み出していた。このような賢治受容は賢治のテクストの「現象」としての性質が媒介してつくり出したものである。賢治自身が提出した「論料」を前にして、人びとは〈物

語〉を紡がずにはいられなかったのである。こうしたテクストの特性と同時代の問題系との連関こそが宮澤賢治の初期受容において、没後急速に受容されることになった主な要因のひとつとして考えられるのである。

以上、本論文の要旨を記した。一九三〇年代という時代状況は〈宮澤賢治〉をどのように発見し、そして以後の〈宮澤賢治〉へと引き継がれる読みのメカニズム（問題機制）を構築していったのか。〈今・ここ〉における〈宮澤賢治〉を理解するためにも、まずは過去の人びとの文学的営為によって紡がれた〈宮澤賢治〉という解釈の成り立ちをひもといていかねばならない。本論文全体はこの問題に一考を加えるものである。